

南部地域の古代製塩土器について

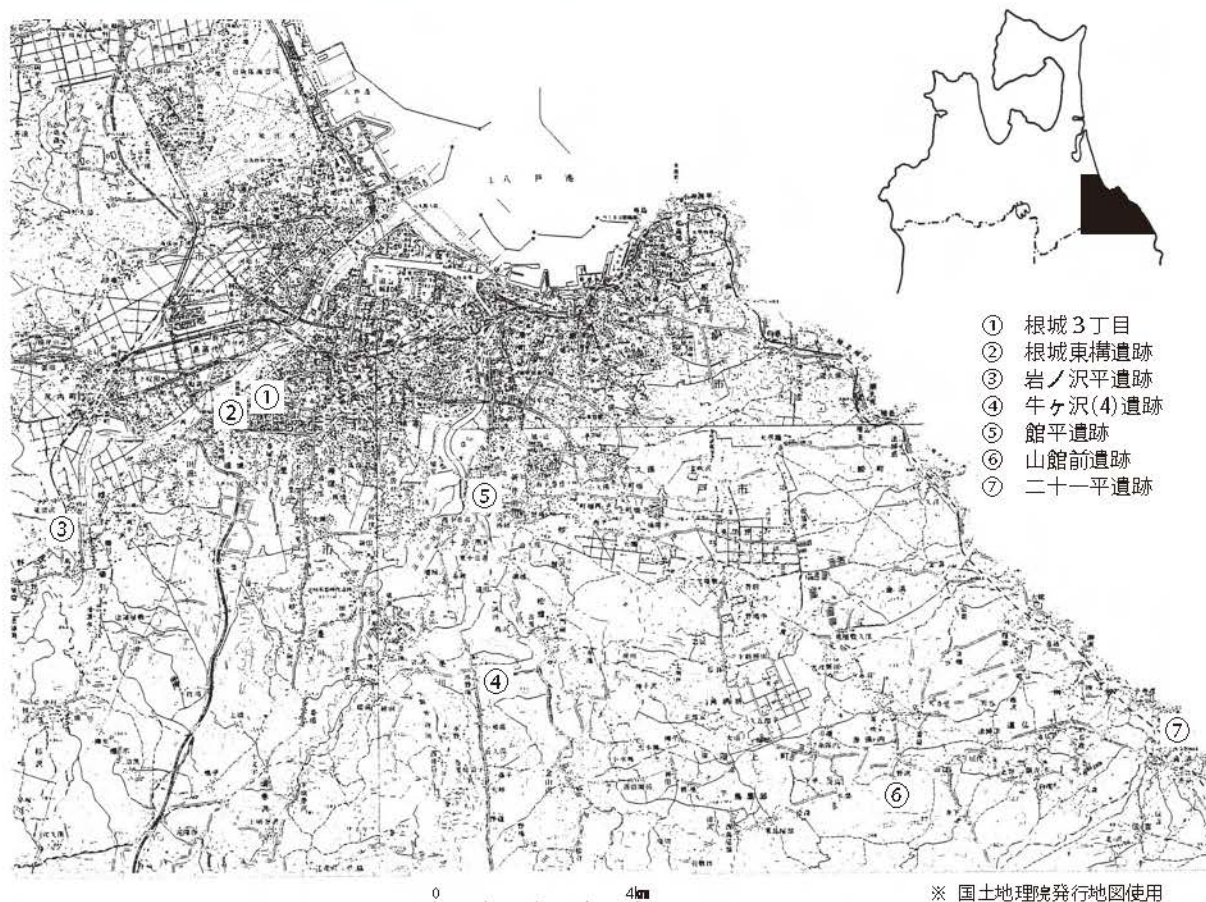
森 淳

1 はじめに

現在この地域の古代の様相はかなり分かりつつあるが、製塩、製鉄などの専業集団、専門作業については一部の遺構、遺物の出土しか分かっておらず、ましてやそのようなものはかなりの確率で報告書から落としがちな資料である。今回八戸市、岩手県種市町のご好意により今までの調査で出土した製塩土器について拓本、図面を取らせて頂いた。資料の収集だけでそこから何かを導き出すところまではいけないが、資料紹介といった形でここに取上げたいと思う。

2 研究史

青森県で最初に古代土器製塩に関する資料が紹介されたのは、1969年に北林八洲晴氏が夏泊半島沿岸各地で発見した平安時代の製塩土器を白砂式と仮称し、土製支脚とともに紹介したのがはじまりである。1970年代同氏は陸奥湾沿岸部を中心に製塩土器をまとめ、橘善光氏は下北半島の調査から製塩土器と捺文土器文化とのかわりを指摘した。1980年代に入り各地の発掘調査から製塩遺構などが発見され、八戸市根城東構地区から南部地域ではじめての古代製塩土器出土報告がなされた。また本県の縄文時代および平安時代の土器製塩資料がまとめられた「土器製塩の研究」が出版された。1990年代全国の土器製塩研究の現状を総括した「日本土器製塩研究」が出版され、東北地方では仙台湾を中心とした太平洋岸と陸奥湾から広く出土することが明らかになった。2000年代発掘調査等により多くの事例報告がなされ、調査研究が行われている。



第1図 南部地域の古代製塩土器出土遺跡

3 南部地域の古代製塩土器出土遺跡

本稿では南部地域の古代製塩土器出土遺跡について、遺跡の立地と海岸までの距離、製塩土器の特徴、時期などを述べる。基本的に輪積痕が明瞭に残り、二次加熱を受け変色や剥離しているものを製塩土器として扱っている。また製塩土器との関係が指摘されている土製支脚も一緒に取り上げた。

①八戸市根城3丁目出土博物館寄贈資料

昭和58年に八戸市根城3丁目、根城小学校南東にあるアパート建設予定地で発見された製塩土器である。標高20m前後で太平洋まで約4.5km、馬淵川まで700mに位置する。口縁部は口径28.6×24cmの楕円形をし、指でつまみ上げたもので、胴部下半から口縁部にかけてゆるやかに外傾するものである。外面は指ナデ調整が行われ、輪積痕が明瞭に残っている。内面は口縁部付近のみヘラナデ調整が行われ、胴部はきれいに指ナデ調整が行われている。同じ場所から9世紀後半～10世紀前半の土師器片が寄贈されている。

②八戸市根城東構遺跡

馬淵川中流域、河岸段丘北端部の標高20m前後に位置し、太平洋まで約5kmである。昭和56～57年に発掘調査が行われた。全て小片だが竪穴式住居15軒、土坑2基から製塩土器片が出土している。口縁部は推定口径24～36cm、器厚1cm前後のもので、口唇をヘラで調整した後に内外面の調整を行った口唇断面が凹状になるもの、指でつまみ上げた口縁部が波打つものがある。外面は指ナデ調整され、輪積痕が残っている。内面は横、斜位ヘラナデ調整が行われている。胴部は器厚0.5～1.8cmのもので内外面ともに指ナデ調整である。内面は丁寧に調整を行っているため輪積痕が残っているものが少ない。断面をみると内面に関しては輪積みをしたあと指ナデによる整形を行い、化粧粘土をはりつけて内面をなだらかにしていると考えられ、その化粧粘土が加熱によりはじけ剥がれてしまっている。底部は2片出土し、推定底径11cmでどちらも柁目状圧痕が残っている。またSI72のカマドから底部に透かしをもつ円筒状中空タイプの土製支脚が1点出土している。土坑(Sk89：13片、Sk127：2片)出土のものは供伴資料がないため時期は不明であるが、竪穴式住居出土のものは供伴資料から8世紀後半(SI115：6片)、9世紀前半～10世紀前半(SI72：3片、SI89：5片、SI92：3片、SI100：2片、SI116：4片)、9世紀後半～10世紀前半(SI75：71片、SI79：1片、SI94：1片、SI97：1片、SI113：17片、SI114：14片)、時期不明(SI112：17片、SI131：2片)の時期設定をしている。このうち一番古いSI115出土の製塩土器に関しては、覆土出土の小片でありその特徴、時期を把握できない。

③八戸市岩ノ沢平遺跡

馬淵川西岸、標高55～60mの丘陵段丘面にあり、太平洋まで約9km、馬淵川まで約1kmに位置する。平成4年の発掘調査で13号住居から製塩土器胴部12片、底部2片が出土している。いずれも小片で内外面とも表面が粗く、内面は剥離しているものが多い。胴部は器厚1～1.5cm、外面は指ナデ調整が行われ、輪積痕が残っている。内面は指ナデ、ヘラナデ調整が行われている。底部は直立気味に立ち上がるもので指頭痕が明瞭に残っている。9世紀後半の時期設定をしている。

④八戸市牛ヶ沢(4)遺跡

八戸市中心部から南南西約6kmの階上町との市堺にあり、標高約50～100mの天狗袋段丘上に位置する。太平洋まで約9km、南側には松館川の支流が東西に流れている。平成12～14年の発掘調査で7軒の竪穴式住居内(73号住：1片、82号住：9片、98号住：20片、101号住：1片、103号住：8片、

104号住：1片、117号住：1片）から製塩土器が出土している。口縁部は指でつまみ上げた器厚0.3～1cmのものである。外面指ナデ、内面横位ヘラナデ調整が行われている。胴部は器厚1～1.8cmで、外面指ナデ調整、内面は指ナデのものと横、縦、斜位ヘラナデ調整のものがある。底部は推定底径15cmで垂直に立ち上がる形をし、粘土を3層重ね厚く作っている。また95号住居からは螺旋状に粘土紐を積んだ円筒状中空タイプの土製支脚が2点出土している。外面は指ナデ調整、内面はヘラ状工具で整形している。平成15年度報告書刊行予定のため供伴資料の詳細は不明だが、9世紀後半～10世紀前半にあてはまる住居ということである。

⑤八戸市館平遺跡

八戸市庁から南東へ約3.5km、太平洋まで約4.5kmに位置する。遺跡は新井田川と松館川が合流する右岸、標高6～37mの高館段丘上に立地している。平成15年度の調査で竪穴式住居内（SI2：1片、SI3：1片）から製塩土器胴部片が出土している。外面は指ナデ、内面は横、縦位ヘラナデ調整のもので化粧粘土が剥離し、下の面に横位ヘラナデ調整が見られる。土製支脚は1点出土している。円柱状中実タイプのもので二次加熱による剥離が激しい。表面は指ナデ調整が行われ、広がる裾の部分には指頭痕が残っている。底面には工具による調整痕が残る。平成15年度報告書刊行予定のため供伴する資料の詳細はわからないが、9世紀後半～10世紀前半にあてはまる住居ということである。

⑥階上町山館前遺跡

階上岳北東山麓段斜面、標高150～170mにあり、太平洋まで約4.5kmに位置する。平成8年度調査の4号土坑から土師器片、ういの棘、貝殻と供に製塩土器片が出土している。この土坑は廃棄用の土坑と考えられ、隣接する2号住居床面から出土した土師器片と接合している。製塩土器は口縁部4片、胴部93片出土している。口縁部は器厚0.3～0.5cmで外傾するか、直立するものの他に、胴部上半で内反して直立気味に立ち上がるものもある。指でつまみ上げてつくるものと口唇をヘラにより平口縁に調整するものがある。外面は指ナデ、内面は剥離したものが多く一部ヘラナデが残るものがある。胴部は器厚1～1.5cmで、外面は指ナデ調整が行われる。内面は口縁部同様、剥離部分が多く一部に指ナデ調整を行っている。また遺構外から土製支脚が円柱状中空タイプ2点、円柱状中実タイプ1点出土している。表面は指ナデ調整が行われ、広がる裾の部分には指頭痕が残っている。供伴資料から9世紀後半～10世紀前半に設定したが、現在10世紀後半～11世紀前半で考えられている。

⑦種子町二十一平遺跡

平成15年度登録された遺跡で、太平洋岸、県堺より岩手県側へ500mほどいった総面積20,000㎡、標高10m未満の砂利浜にある。現状は多くの製塩土器片、土製支脚片、焼け石の散布がみられ、分布調査では天箱3箱の表採ができた。口縁部は推定口径20～36cm、器厚0.3～1.2cmのもので外傾するか、直立するものと考えられる。口縁部は指でつまみ上げてつくるもの、口唇をヘラにより平口縁に調整するもの、ヘラ調整した後内外面調整を行い口唇断面が凹状になるものがある。底部は直立気味に立ち上がるものが多いが、張り出すもの、小さな底部をもつものがある。底部圧痕には木葉痕、砂底があり、粘土を2～3層重ね厚く作っている。外面は指ナデ調整による指頭痕が明瞭に残り、内面は化粧粘土をはり緩やかに立ち上がらせるものが多い。推定底径は14～32cmである。供伴する土師器が出土していないため時期不明である。土製支脚は小片が多く全体形を把握できるものは少ないが円柱状中実タイプ、円柱状中空タイプ、円筒状中空タイプの3種類がみられる。

4 まとめ

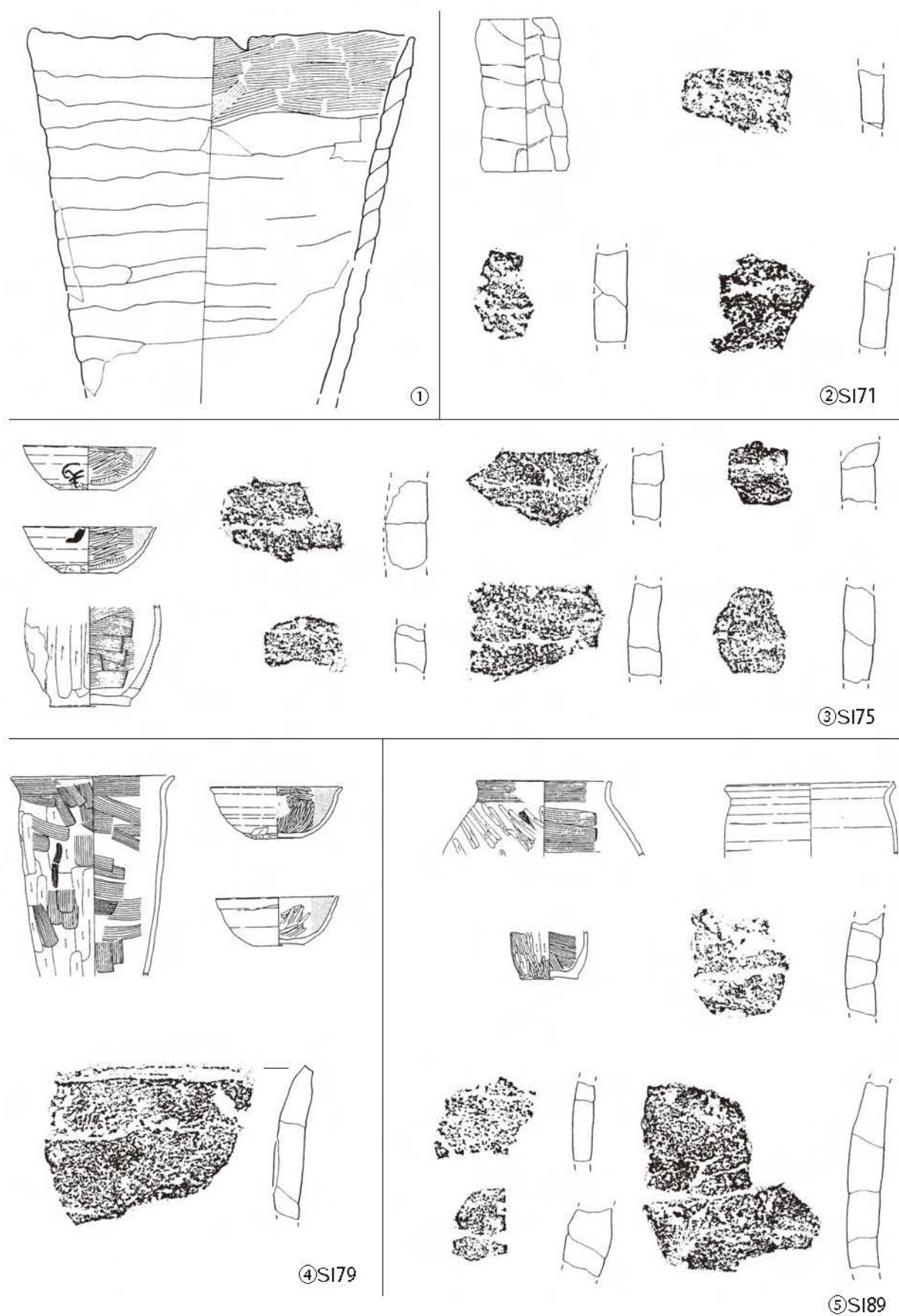
製塩土器の特徴：〔口縁部〕指でつまみ上げた口縁が波打つもの、ヘラ調整により平口縁を呈するもの、口唇をヘラ調整した後内外面調整を行い断面が凹状になるものがあり、直立気味に立ち上がるもの、内反するもの、外傾するものがある。外面は指ナデ、内面は横、斜位ヘラナデ調整するものがある。〔胴部〕外面は指ナデ調整され、輪積痕が明瞭に残っている。内面は外面と違い丁寧に縦、斜位ヘラナデ調整が行なわれているものが多く、化粧粘土などで輪積痕の凹凸を無くしている。〔底部〕直立気味に立ち上がるものがほとんどであるが、外傾するもの、小さな底をもつもの、張り出すものがある。土師器甕と比べて粘土を2～3層重ねて厚く作っているものが多い。底部圧痕は木葉痕、砂底、柁目などを残すものがある。〔色調・胎土〕赤褐色、灰白色、黄褐色のもので二次加熱により粗く、剥離しているものが多い。炭化物などの付着はみられないが、根城東構、牛ヶ沢(4)遺跡のものには胎土中に黒色の小さな粒が多く入っているものもある。〔時期〕ほとんどのものは9世紀後半～10世紀前半の範疇に考えられるものが多い。一番新しい段階の資料は10世紀後半～11世紀前半のものとされる山館前遺跡出土資料である。〔土製支脚〕円柱中空タイプ、円柱中実タイプ、円筒中空タイプのものが7遺跡中5遺跡について確認できた。〔立地〕ほとんどの遺跡が馬淵川、新井田川沿いに位置する。山館前遺跡だけが川沿いにないが、遺跡から海が一望できる場所にあり、土坑からういの棘、貝殻などが一緒に出土していることから海へ行き来していたものと考えられる。また種市町の二十一平遺跡は、南部地域の製塩生産遺跡として考えることができる最初の遺跡である。昭和の前半くらいまで太平洋岸の青森県八戸市金浜、階上町追越、楸、小舟渡、岩手県種市町種市、八木、小子内、有家、久慈市桑畑、侍浜、白前、麦生といった地域は塩の生産が行なわれている。しかし多くの場所が湾岸工事、津波などの影響で破壊され現在見るができない。この地域の古代製塩を考える上で重要な遺跡になると思う。今回は資料紹介のみで、研究紀要としては未熟な掲載になってしまった。現在種市町千田政博氏、北上市君島武史氏と太平洋岸の製塩遺跡に関して分布調査を行っている。今後も継続して調査研究を行い、また報告していきたいと思う。

※ 今回、本稿を作成にあたり八戸市博物館、八戸市文化課、種市町教育委員会には数々の便宜を図って頂いた。また藤田俊雄（八戸市博物館）、宇部則保（八戸市教育委員会）、小笠原善範（八戸市教育委員会）、大野亨（八戸市教育委員会）、小保内裕之（八戸市教育委員会）、小久保拓也（八戸市教育委員会）、千田政博（種市町教育委員会）、君島武史（北上市教育委員会）の各氏からご教授、ご指導頂いた。この場をおかりして心からお礼申し上げる。（順不同）

※ 八戸市、種市町出土の未発表資料及び未掲載資料に関しては、各担当者から資料掲載の内諾をもらっている。また八戸市根城岡前遺跡、市子林遺跡、田向冷水遺跡の未発表資料中にも製塩土器片が確認されているということである。

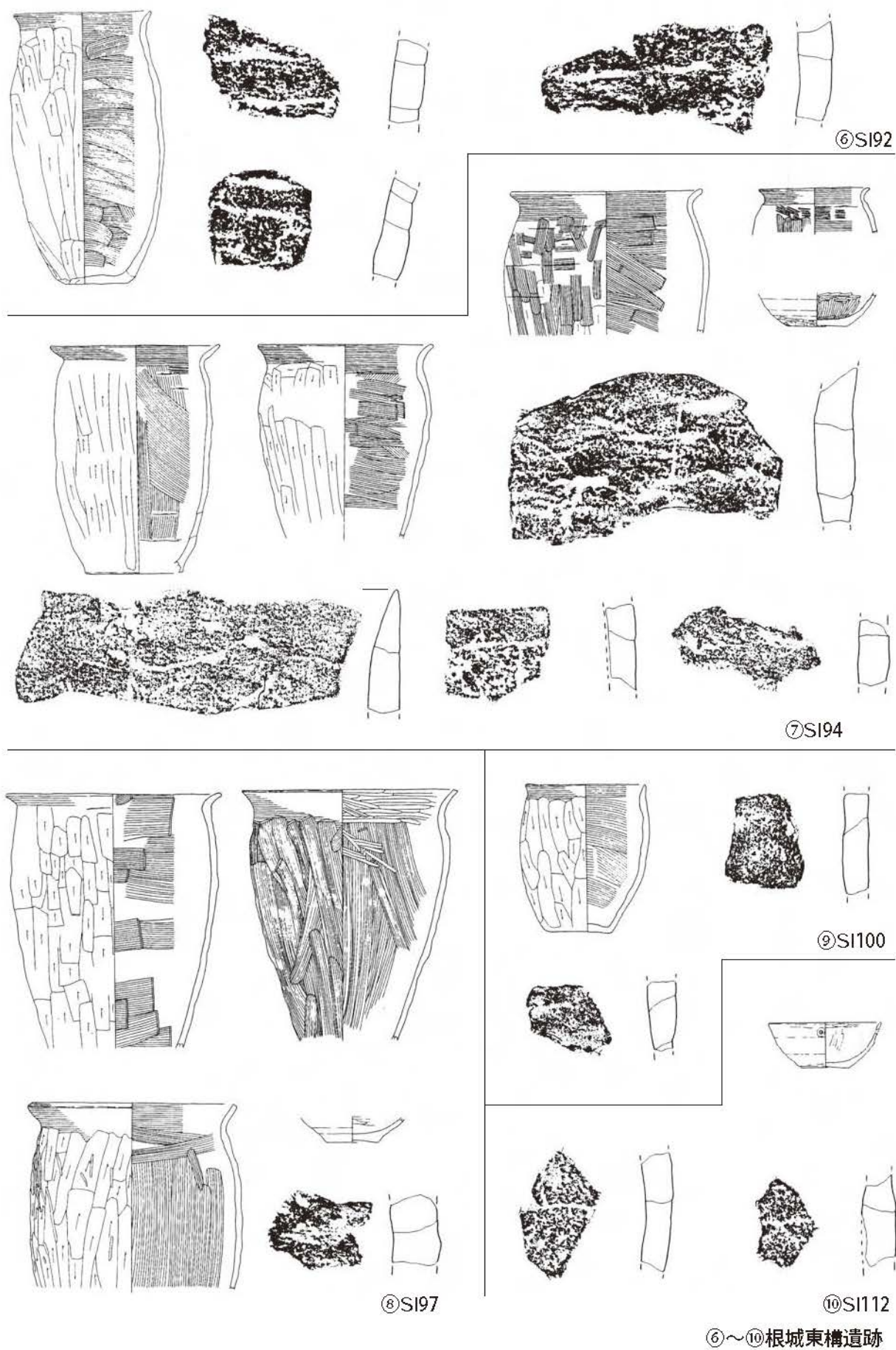
※ 図版は拓本：2分の1、根城4丁目：4分の1、土製支脚：4分の1、他の出土資料に関しては縮尺不同で載せた。

※ 〈参考文献〉 八戸市教育委員会：「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ」（1983）、「岩ノ沢平遺跡発掘調査報告書Ⅱ」（1993）、「大仏遺跡Ⅱ」（2003）、階上町教育委員会：「山館前遺跡発掘調査報告書Ⅱ」（2001）、北林八洲晴：「考古学研究第18巻4号—青森県陸奥湾沿岸の製塩土器—」（1972）、「北奥古代文化第5号—陸奥湾沿岸における土器製塩—」（1973）、「日本土器製塩研究—青森—」（1994）、橘善光：「うとう第80号—下半島の製塩—」（1974）、「北海道考古学第13—青森県宿野部上野平遺跡—」（1977）、近藤義郎：「考古学研究26～27巻—土器製塩の話1～4—」（1979～1980）、一町田工：「青森県考古学第2号—尻高(5)遺跡・郷沢遺跡の製塩土器—」（1985）、柴田陽一郎：「秋田県埋蔵文化センター研究紀要8号—秋田県内における土製支脚について—」（1993）、濱田宏：「岩手県埋蔵文化財センター研究紀要XIX—岩手県内出土の土製支脚—」（2000）、宇部則保：「海と考古学とロマン—東北北部型土師器にみる地域性—」（2002）、君島武史：「北上市立埋蔵文化財センター紀要第1号—東北地方の製塩土器—」（1999）

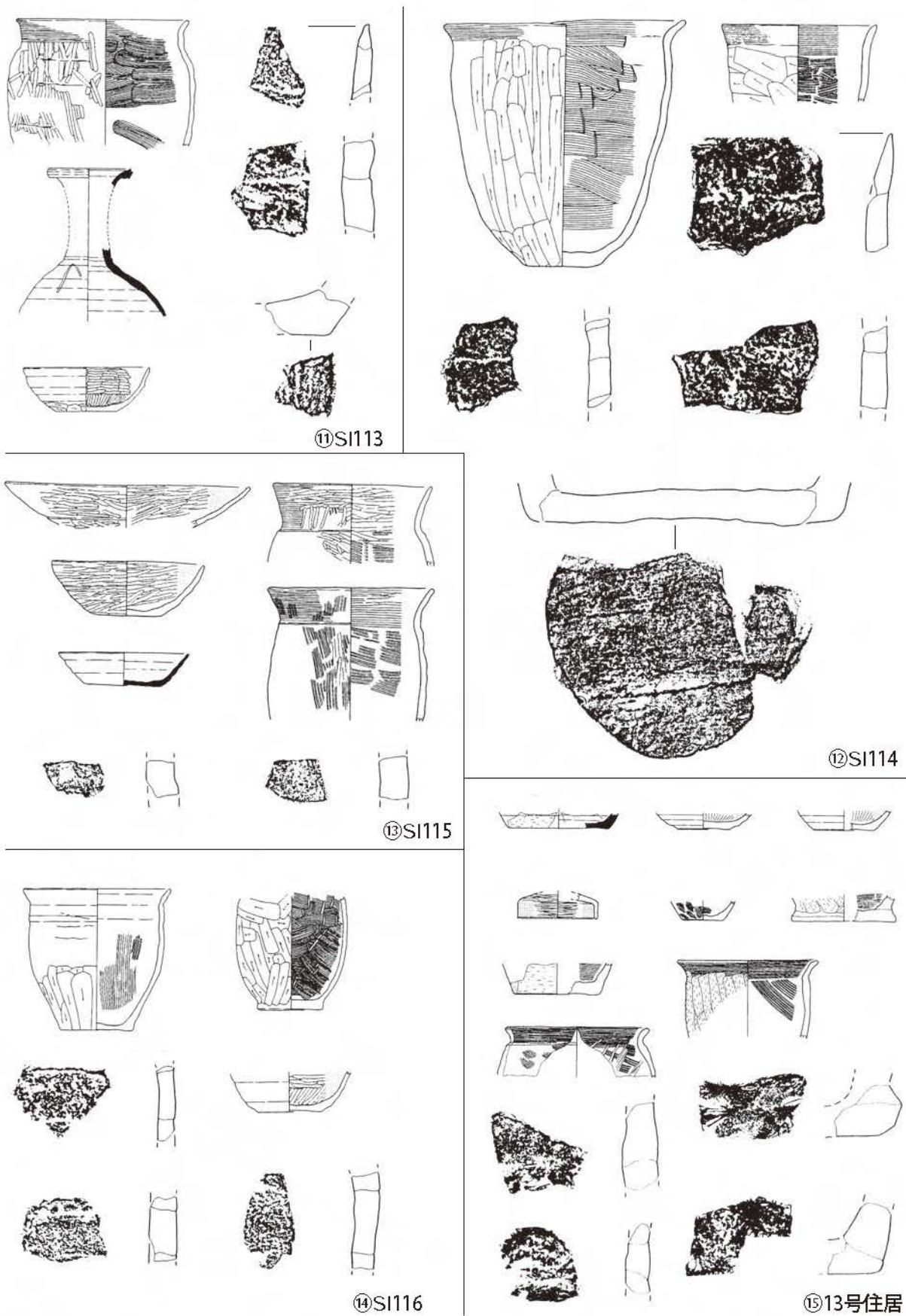


①根城3丁目 ②～⑤根城東構遺跡

第2図 南部地域の古代製塩土器

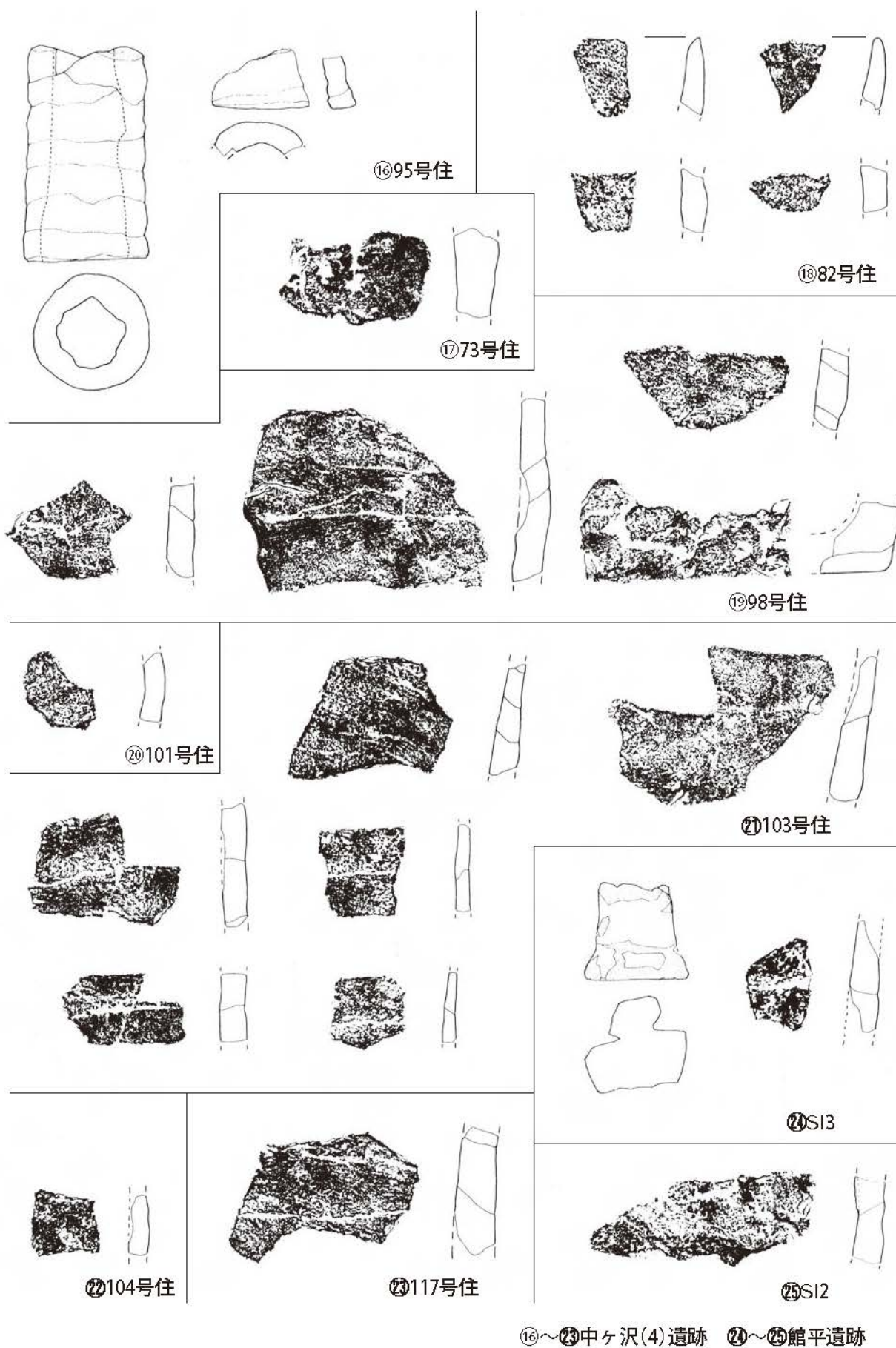


第3図 南部地域の古代製塩土器

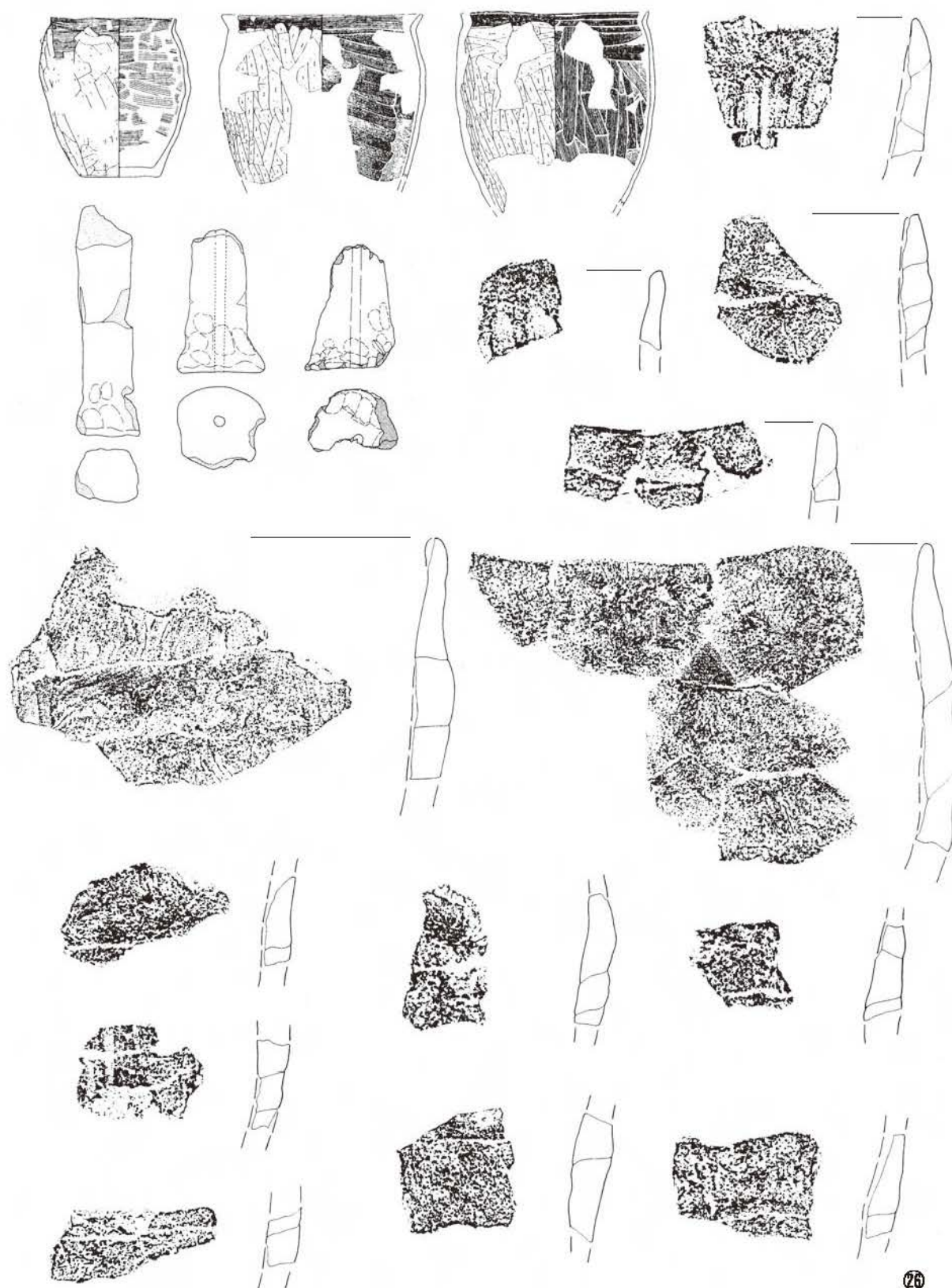


⑪～⑭根城東構遺跡 ⑮岩ノ沢平遺跡

第4図 南部地域の古代製塩土器



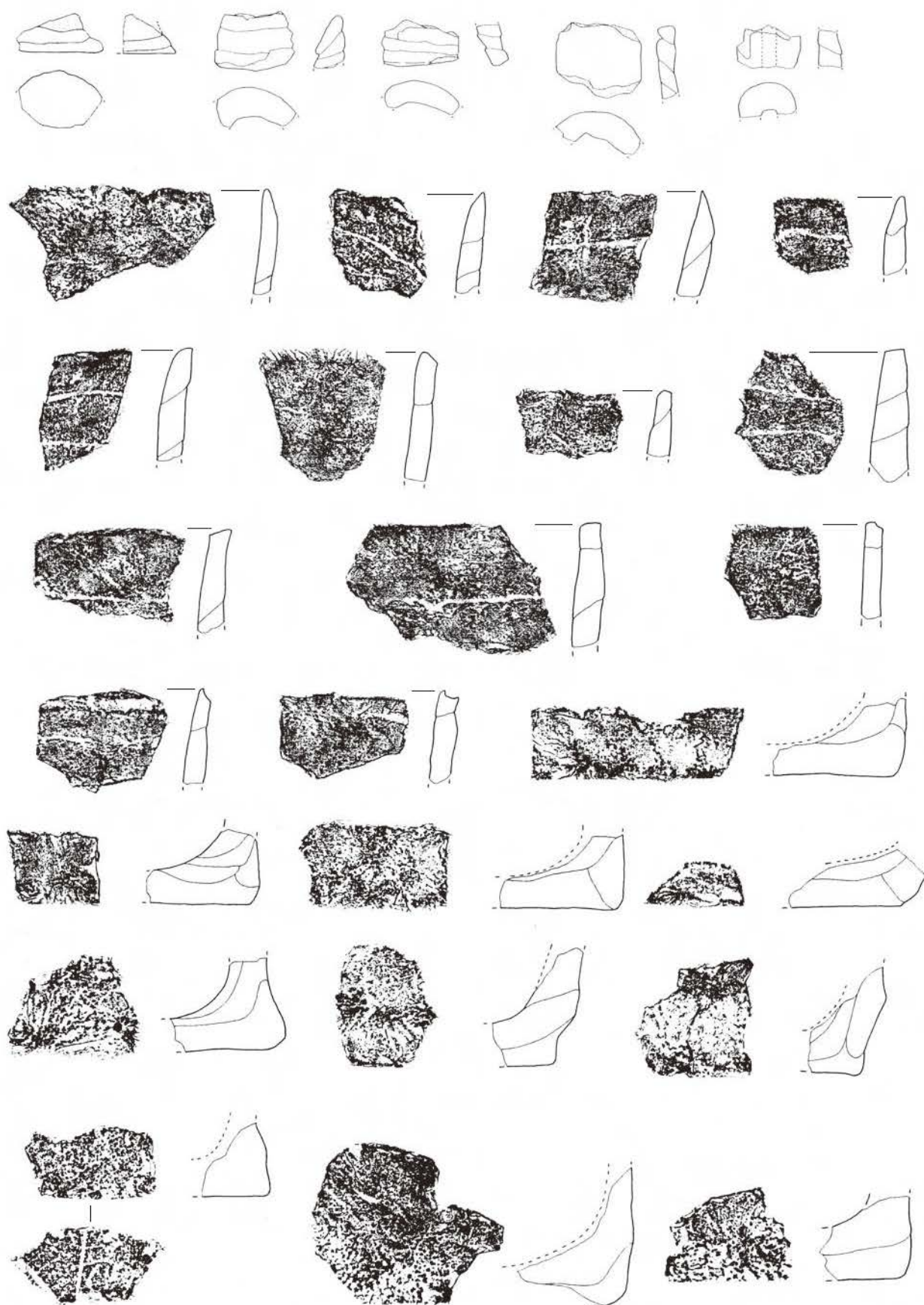
第5図 南部地域の古代製塩土器



26

26山館前遺跡

第6図 南部地域の古代製塩土器



⑦二十一平遺跡

第7図 南部地域の古代製塩土器